

2021年7月11日（日）聖霊降臨後第7主日

銀座教会 家庭礼拝

礼拝招詞 「あなたの祭壇に、鳥はすみかを作り つばめは巣をかけて、雛を置いています。万軍の主、わたしの王、わたしの神よ。いかに幸いなことでしょうか。あなたの家に住むことができるなら まして、あなたを賛美することができるなら。」

詩編 84 編 4～5 節

主の祈り

天にまします我らの父よ、願わくはみ名を崇（あが）めさせたまえ。

み国を来らせたまえ。みこころの天になるごとく地にもなさせたまえ。

我らの日用の糧（かて）を今日も与えたまえ。

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。

我らを試みにあわせず、悪より救い出（いだ）したまえ。

国と力と栄とは限りなく汝（なんじ）のものなればなり。 アーメン

使徒信条

讚美歌 220 日のてるかぎりは

聖書

マルコによる福音書 4 章 26～34 節

4:26 また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、4:27 夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。 4:28 土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。 4:29 実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである。」 4:30 更に、イエスは言われた。「神の国を何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。 4:31 それは、からし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、 4:32 蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」 4:33 イエスは、人々の聞く力に応じて、このように多くのたとえで御言葉を語られた。 4:34 たとえを用いずに語ることはなかったが、御自分の弟子たちにはひそかにすべてを説明された。

牧会祈禱

天の父なる神さま。聖霊降臨後第7主日の礼拝が赦されたことを感謝します。コロナウイルスの蔓延防止に努める社会的状況がなおも続きますが、心を平静に、神様を見上げて歩み進めることができますように。私たちが地上にあって、神様の御国を仰ぎ見る幸いが与えられていることに感謝いたします。教会はあなたの御体であり、地上にあって、すべての民を礼拝に招いておられます。私たちは神様の教会の枝です。教会に繋がる幸いを覚えつつ、この時を過ごすことができるようにお支え下さい。教会間で行われる夏の諸行事をお守りください。例年の諸行事を行うことができなくと

も、大切な記憶を思いめぐらし、かつて与えられた信仰を今一度強める時をお与えください。感染者はじめ命を支えるために働く医療従事者をお支え下さい。隣人愛をもって働く全ての者たちを御手の内に覚え、お支えください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン

説教 「御国を知らされる」

伝道師 藤田 健太

主イエスは様々な譬えによって「神の国」をお語りになりました。主イエスがお語りくださる譬えは私たちにとって必ずしも分かりやすい内容ではありませんでした。「譬え」はむしろ「謎かけ」に近く、いったいなぜ、主はそのような仕方です。「神の国」をお伝えなさるのだろうかと思いに思っています。しかし、考えてみれば、そのような方法以外に、言葉の上で、私たちが「神の国」について理解を深めることは不可能でなかったかとも納得させられます。私たちの言葉の限界というものがあります。使徒パウロもまた、人間の言葉を尽くして福音を告げ知らせる「宣教」は「愚かな手段」であるというある種のわきまを持っていました(コリント一1章21節)。地上においては、神の国は譬えによって知ることしかできなかったという説明があります。「神の国」を知るために私たちに与えられている場所として教会があります。言葉と、言葉の実現である教会の双方によって、私たちに神様の御国を知る幸いが与えられています。

先週主日礼拝の聖書箇所として与えられた4章1～9節に引き続き、本日の箇所でも主イエスは「神の国」を植物の種に譬えてお語りになります。「からし種」は「黒芥子(くろからし)」＝ブラック・マスタードという植物の種子であると言われます。数ミリからなる小さな種から2～3メートルの大きな茎にまで成長する多年草です。最も小さな種というわけでもなければ、ここで言われるような「木」にまで成長することはありません。主イエスはここで、実際の植物自体についてお語りになっておられるわけではありません。実際の植物を一つの手掛かりとして「神の国」の成長についてお語りになっておられるのです。「教会」の成長についてお語りになっておられると言っても良いでしょう。

32節には「蒔くと、成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る」とあります。この言葉の背後には、旧約聖書の時代に預言者たちが語った「世界樹」のイメージが反映されていると言われます。エゼキエル書17章や31章、ダニエル書4章にそのようなイメージが登場します。そこでは、バビロニアやエジプトといった超大国が「鷲」や「鳥」に譬えられ、地上における神の都エルサレムが「レバノン杉」に譬えられます。旧約の預言者の幻の中では、鳥たちは都に茂る木を荒らすため飛来する危険な存在です。しかし、主イエスの譬えの中では、樹の幹は他のどんな植物よりも大きくなり、枝を張って、鳥たちに住まいを与えるとされています。礼拝の招詞として先ほどお読みした詩編84篇4～5節には、神の家を慕う人々の願いが込められます。主イエスの譬えには、神様の御国の赦しと招きが語られます。地上にあって神様の御国をあらゆる「共同の教会」は、全ての民を礼拝に招いているのです。

主が譬えを用いてお語りになる「神の国」のもう一つの側面は、26節以下に次のようにあります。「人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない」。当時の農耕・栽培の営みを想起させるような、まことにおおらかで、少し無責任とも思えるような1節です。神の国の成長に

ついて、人間は与り知ることができないとされます。夜昼、寝起きするような、私たちの営みの中で、神の国は知らず、成長してゆくとされます。もちろん、教会は日曜には絶えることなく礼拝を守ります。日毎の祈りもおささげします。その他、地上にあって、こなしていかなければいけない仕事が山積しています。しかし、そのような中で、私たちは自分たちの手によって教会が立てられると錯覚してはいけません。あるいは、そのように自分たちで背負いこむ必要はないのだと諭されています。それはかつてイスラエルの王国時代、王を欲したイスラエルの民たちに対して、預言者サムエルが諭しと忠告を与えた通りです（サムエル記上 8 章）。私たちがこの譬えを教会の維持や成長を軽んじる口実にしてはいけないのは言うまでもありません。私たちの言葉による宣教が愚かな手段であったとしても、主はご自分の御力を表わすため、そのような道をお選びくださいました。この恵みにお応えするため、私たちはその道に励みたいと思います。

教会は「からし種」のように成長してゆきます。全ての民を礼拝に招く公同の教会は、私たちの目に見えなくとも、主ご自身が建て上げてくださいます。私たちが伝道によって主を知らせる前に、主ご自身のお働きによって、私たちは御国を知らされます。教会は主の体です。主はご自分の体の枝として、私たち一人ひとりを教会の主にある交わりに加えてくださっているのです。

天の父なる神さま。私たちに神の国を知らせて下さりありがとうございます。私たちの拙い言葉を用いて、あなたは御自分の伝道の業を推し進めるお方です。あなたの御力に信頼して、与えられている道に励むことができるようにお支え下さい。主のみ体である目に見えぬ教会の交わりを信頼し、私たちに与えられている目に見える兄弟姉妹の交わりに感謝して歩むことができますように。

主イエスの御名によって祈ります。 アーメン

祈 禱（各自、自由にお祈りください）

祈禱課題 夏の教会の様々な催しについて覚えて祈りましょう

病を負っている方々とそのご家族に主の癒やしを祈りましょう

命の危機、不安と孤独に直面している方々に主の恵みを祈りましょう

医療従事者の健康が守られ使命が支えられますように祈りましょう

讃美歌 229 まく者いそしみ 種まきしに

献 金

頌 栄 544

祝 禱

主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。

アーメン